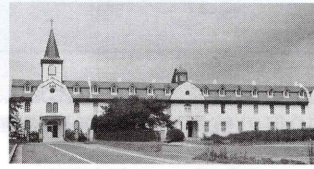


北辰

TOKYO

岐阜県立多治見北高等学校同窓会
東京支部会報 第13号



平成11年9月26日
発行人 鈴木 満

「継続は力なり」——東京同窓会の10年を振り返って——

多治見北高等学校同窓会・東京支部

会長 鈴木 満

1 はじめに

東京支部（東京同窓会）は、平成2年11月に四谷の主婦会館で設立総会を開いてから今年で10年目を迎えました。来る11月13日に改装なった主婦会館・現「プラザエフ」で開催される総会が記念すべき第10回大会ということになります。

思い起こせば、平成元年秋頃、当時公正取引委員会審査部の総括課長をしていた私のところに、突然、大角先生が某大物代議士の秘書を伴って訪ねてこられました。話は、「北高が創設されて30年余になるが、同窓会の支部が一つもない。ひとつ君が“きもいり”になって支部を作ってくれないか」という内容でした。「私ごときに会うのに代議士秘書を介するなんてなんておおげさな」という印象と「こんなに熱心に頼まれたら断り切れないだろうな」という思いが交錯したのを憶えています。実は昭和58年に20名程度の同窓生が讃岐会館で会合を開いたことがあり、その後、参加者の一部から私に支部の旗揚げを催促する動きがありました。機は熟しつつあったのです。

その後、何回かの準備会合を経て前記の設立総会となりました。

2 東京同窓会3つの特色

支部設立と同時に会長を仰せつかった私は、「「継続は力なり」、東京同窓会を永続性のあるものにしよう」と訴え続けてまいりました。爾来10年、東京同窓会は次の3つの特色ある活動を中心にして着実な歩みをしてきました。

特色ある活動の第1は、毎年開催する総会と懇親会の際に、各方面で活躍している同窓生を講師として「北辰 TOKYO カルチャーフォーラム」と称して講演会を行っていることです。北高の卒業生は人材が揃っているのです。講師は極力自前で調達したいとの考えがあったのです（講師料を払うお金がないという理由も無視できませんが）。従来、芸術家、学者、医者の方が講師を務めることが多かったように思いますが、これも北高らしさを表していると思います。講師には交通費等を除いて無報酬（ボランティア）でお願いしています。

そして、このイベントを企画するのは「年度幹事」です。当初は企画委員会が行っていましたが、3年目ぐらいから「年度幹事システム」を採用することになりました。毎年同じ人が担当するのは大変だしマンネ

りに陥るおそれがあるからです。去年は9・19回生が、今年は10・20回生が「年度幹事」です。

特色の第2は、会報「北辰 TOKYO」を毎年欠かさず発行していることです。最初の数年は毎年2回発行していましたが、発送経費の関係から現在は年1回になっています。

なお、本部でも今年から会報「北辰」が発行されました。これを契機に、1999年8月27日付け東濃新報が「多治見北高校同窓会を再構築」と報じていることは、会報発行の意義を雄弁に物語っているように思いました。

特色の第3は、北高出身の芸術家の作品を表紙にした「支部会員名簿」を継続して発行していることです。もちろん表紙制作はボランティアでやってもらっていますし、名簿の広告も同窓生有志からの「協賛」です。この広告費は名簿作成費用の相当部分を賄ってくれています。かつては毎年発行していましたが、毎年「協賛広告」を出してもらうのも大変だろうと、数年前から3年おきに発行することになりました。

3 同窓会を支えるのは「ボランティア活動」

東京同窓会の上記の特色ある活動は、同窓生の「ボランティア活動」に支えられています。東京同窓会・会員のみなさんには、毎年、3000円の会費を支払い、総会・懇親会へ7月に行われる役員会への出席、会報・総会資料等の発送作業を、年度幹事には総会やイベントの企画・準備作業を、いずれもボランティアでやってもらっています。

4 おわりに

この10年で東京同窓会活動の基礎固めは終わりに近づいたようですので、私はそろそろ後進に道を譲ろうと考えています。今後はもう少しきめの細かい活動も加えていく必要があるかもしれません。いずれにしても、「継続は力なり」という言葉を忘れないようにしてもらいたいと思っています。

もう一つの課題を忘れるところでした。それは、近時議論されている「東濃への首都移転」が「夢物語」に終わらず「現実のもの」になった場合のことです。支部規約によれば「支部の事務所は、首都圏に置く」とありますので、首都が本当に東濃に移転したら支部規約を改正する必要があるのです。果たしてその日が来るのでありましょうか。

多治見北高校同窓会東京支部10周年を祝う!!

岐阜県立多治見北高等学校同窓会
会長 若尾賢治

平成2年11月多治見北高東京支部、鈴木船長の東京丸が出航して以来、10年の航海を終え無事帰国されようとしております。

その間、東京支部は毎年の支部総会と同時に趣向を凝らした「カルチャーフォーラム」等を実施され充実した同窓会活動をされていることに対し鈴木支部長はじめ、各年度役員の皆様の献身的な努力に対し敬意を表する次第であります。

去る3月28日、完成待ちわびた新体育館で行なわれました、多治見北高創立40周年記念同窓会に於いて、不肖私が会長としてご推挙を賜り、その重責を担うことになりました。

もとより浅学非才、その大任に身の引き締る思いを致しております。

40周年は総会、記念講演会、会場を移動して多治見市民プラザの大ホールで小芝前会長のもとにおいて、なごやかな懇親会が盛会に行なわれました。

その折、東京支部会員の皆様には遠路多数のご出席を賜り、記念式典を盛りあげていただきありがとうございます。紙面を借りて改めてお礼申し上げます。

北高同窓会も40周年記念同窓会を終え、新たに迎える大きな節目、50周年に向けて再スタートとなりました。

先の総会において、東京支部、西日本支部の強い要請のもとに両支部長の本部役員への参加も決まり、従来になかった同窓会の幅広い展開がはかれると思っております。

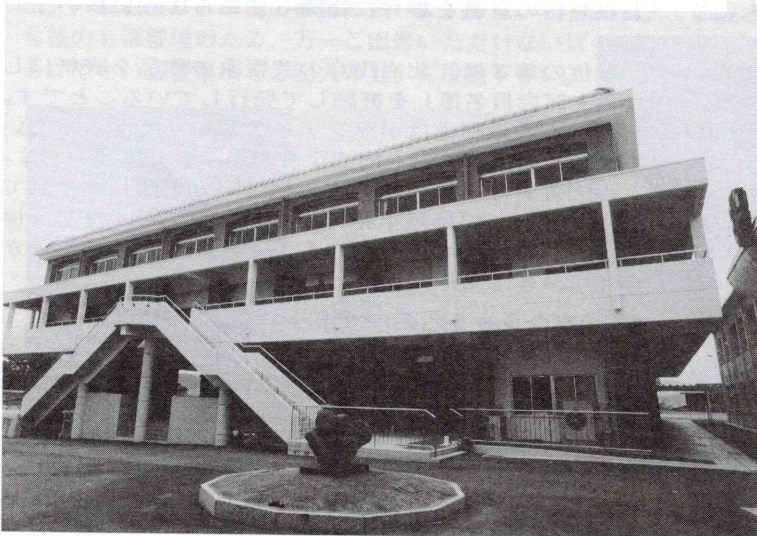
その後の本部役員会（於・多治見）にて活動計画を討議し、その第一弾として、広報委員会の皆様のスピード感溢れる活躍のもと、会報「北辰」創刊号の発刊となり、40周年記念総会等の様子、母校の現況、創立時の恩師の回想、各学年の活動状況を発信することが出来ました。

この北辰を通して各学年の親睦のみならず、学年を越えた新しい出会いが芽ばえ、新しい考えが生まれ、同窓会の活性化につながればと期待しております。

40周年記念同窓会を終え、盛り上がった同窓会活動を、更に継続して行くため、東京支部、会員の皆様におかれましても、尚一層のご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、東京支部の発展と、会員の皆様の益々のご活躍、ご健勝を祈念申し上げます。

完成した新体育館



撮影：小川景之氏（6回生）

母校創立40周年と同窓会再構築を報じる
地元紙「東濃新報」1999.8.27付より



多治見北高が創立40周年を迎え、先ごろ記者会見を開き、同窓会が再構築されたことを報告した。同窓会が再構築されたのは、この40周年を機に発行された同窓会報「北辰」の創刊号が本紙へ届けられた。各年度ごとの会合はあつたようだが、事情があつて全体の総会は有名無実で、もう二十年あまりも眠り続けられていた。前会長の一回生小芝邦章さんがこれを気にして苦勞のすえ、四十周年を機にキチッとした組織を発見させ、役員には会長に日陶製陶所社長の若尾賢治さん、副には尾関忠一弁護士や籠橋兵衛さん、ほかにも地元で活躍中の若手経営者らがズラリ並んで、意気揚々の船出である。

本紙は中央の政治家こそないが、北高出身の著名な経営者や芸術家、大学教授や特別企画の対談などでお世話になつており、とくに、東京支部や関西支部の総会取材し、故郷の人たちにその活躍ぶりをお知らせしてきたから、まさか本部の方から毎年卒業生から会費を集めるだけで、あまり機能していなかったことが不思議に思われる。いまや卒業生一万三千人の国公立大学入学者を輩出する県下でも有数の進学校で、スポーツでも陸上やボクシングではインターハイや団体出場選手

多治見北高が創立40周年を迎え、先ごろ記者会見を開き、同窓会が再構築されたことを報告した。同窓会が再構築されたのは、この40周年を機に発行された同窓会報「北辰」の創刊号が本紙へ届けられた。各年度ごとの会合はあつたようだが、事情があつて全体の総会は有名無実で、もう二十年あまりも眠り続けられていた。前会長の一回生小芝邦章さんがこれを気にして苦勞のすえ、四十周年を機にキチッとした組織を発見させ、役員には会長に日陶製陶所社長の若尾賢治さん、副には尾関忠一弁護士や籠橋兵衛さん、ほかにも地元で活躍中の若手経営者らがズラリ並んで、意気揚々の船出である。

本紙は中央の政治家こそないが、北高出身の著名な経営者や芸術家、大学教授や特別企画の対談などでお世話になつており、とくに、東京支部や関西支部の総会取材し、故郷の人たちにその活躍ぶりをお知らせしてきたから、まさか本部の方から毎年卒業生から会費を集めるだけで、あまり機能していなかったことが不思議に思われる。いまや卒業生一万三千人の国公立大学入学者を輩出する県下でも有数の進学校で、スポーツでも陸上やボクシングではインターハイや団体出場選手

多治見北高が創立40周年を迎え、先ごろ記者会見を開き、同窓会が再構築されたことを報告した。同窓会が再構築されたのは、この40周年を機に発行された同窓会報「北辰」の創刊号が本紙へ届けられた。各年度ごとの会合はあつたようだが、事情があつて全体の総会は有名無実で、もう二十年あまりも眠り続けられていた。前会長の一回生小芝邦章さんがこれを気にして苦勞のすえ、四十周年を機にキチッとした組織を発見させ、役員には会長に日陶製陶所社長の若尾賢治さん、副には尾関忠一弁護士や籠橋兵衛さん、ほかにも地元で活躍中の若手経営者らがズラリ並んで、意気揚々の船出である。

本紙は中央の政治家こそないが、北高出身の著名な経営者や芸術家、大学教授や特別企画の対談などでお世話になつており、とくに、東京支部や関西支部の総会取材し、故郷の人たちにその活躍ぶりをお知らせしてきたから、まさか本部の方から毎年卒業生から会費を集めるだけで、あまり機能していなかったことが不思議に思われる。いまや卒業生一万三千人の国公立大学入学者を輩出する県下でも有数の進学校で、スポーツでも陸上やボクシングではインターハイや団体出場選手

多治見北高が創立40周年を迎え、先ごろ記者会見を開き、同窓会が再構築されたことを報告した。同窓会が再構築されたのは、この40周年を機に発行された同窓会報「北辰」の創刊号が本紙へ届けられた。各年度ごとの会合はあつたようだが、事情があつて全体の総会は有名無実で、もう二十年あまりも眠り続けられていた。前会長の一回生小芝邦章さんがこれを気にして苦勞のすえ、四十周年を機にキチッとした組織を発見させ、役員には会長に日陶製陶所社長の若尾賢治さん、副には尾関忠一弁護士や籠橋兵衛さん、ほかにも地元で活躍中の若手経営者らがズラリ並んで、意気揚々の船出である。

本紙は中央の政治家こそないが、北高出身の著名な経営者や芸術家、大学教授や特別企画の対談などでお世話になつており、とくに、東京支部や関西支部の総会取材し、故郷の人たちにその活躍ぶりをお知らせしてきたから、まさか本部の方から毎年卒業生から会費を集めるだけで、あまり機能していなかったことが不思議に思われる。いまや卒業生一万三千人の国公立大学入学者を輩出する県下でも有数の進学校で、スポーツでも陸上やボクシングではインターハイや団体出場選手

2回生同窓会に出席して

中央線の古虎溪を過ぎてトンネルを出ると懐かしい風景が車窓に飛び込んでくる。土岐の川水は澄み、四囲の青山も開発が進んで市域が広がっている。やはり故郷は遠くにて思うのも良いが、盆くらいは帰りたいものである。

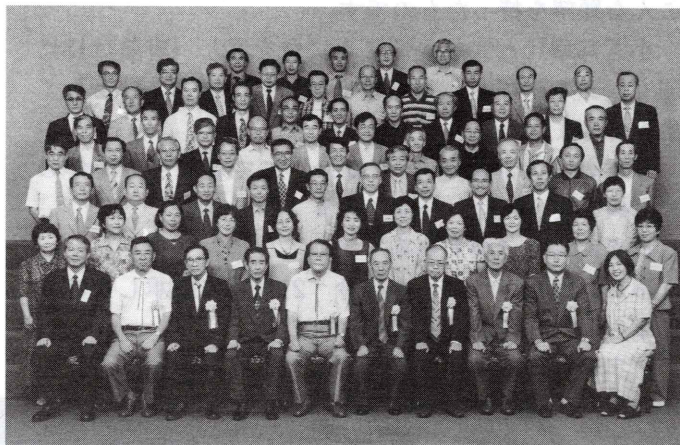
8月14日（土）午前11時30分より北高2回生同窓会が高砂殿で開催された。5年ごとに開催しようと約束してから第3回目を迎えた。西寺雅也・尾関恵一両君をはじめ世話人の方々のご労苦に心から感謝しております。当日は恩師並びに同窓の諸氏で90名を超える盛況であった。中には卒業後初めて顔を会わす者もあり、当時の面影をしきりに探り当てる光景も見られた。

今年は創立40周年を迎え、全体の記念同窓会も開催された。お互いに歳をこの間重ねてきたが、会う仲間同士はその隔たりを感じさせない気心の知れた雰囲気満たされていた。リストラの対象や定年が近づきつつある厳しい環境にもかかわらず、前向きの姿勢が一段と強く表れていた。やはり、同窓生との語らいはいいものですね。

恩師の先生方からは近況報告をいただき、なお意気

軒高なところを感じました。あるテーブルでは北高の硬式野球チームが結成され、将来は甲子園を目指そうという話題もあり、楽しいひとときに時間の経つのが惜しかった。この後は、2次会で半分程のメンバーが近くの備長に移動して、さらに打ち解けた雰囲気のもとで酒を汲み交わした。第4回目は“還暦同窓会”となり、はやその開催が待ち遠しい様子であった。

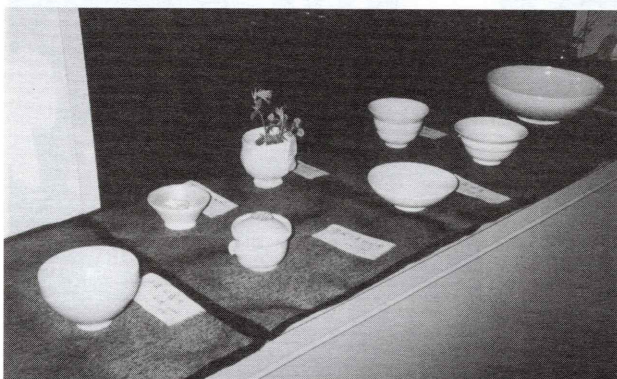
（2回生 水野紀男）



東京地区4回生近況報告

7月1日から8日まで東京大手町ビルの大手町画廊で、陶芸家として現在活躍している4回生の山下眞喜さん（久々利在住）が個展を開きました。彼女の作る作品は、モダンな感覚の中に日本の伝統美を彷彿とさせる繊細且つ優美なオリジナリティに満ち、見る人を魅了して止みません。また、この機会に東京在住の同期生が集い、彼女の個展を觀賞すると共に旧交を温めました。4回生も故郷がなんだか気になる年になったようです。

（4回生 浅井弥生）



“田舎のいものような書を書きたい”

1回生 竹内正春（雅号 春翠）

今から45年も前になりますか……小生中一の頃、翠軒流の先生、酒を飲み白髪振り乱しての揮毫を目のあたりにし、

“よし、自分も藝術家になるゾ！”

と、子供心にも思い、

“50歳になったらその道を、70歳になったら藝術家（の端くれ？）といわれるようになりたい……”

こんな願望を持ったものです。

小芝邦章氏と20歳かそこらに會を興し（書塾は18に開く）グループを、寺子屋をそして作家（？）として生きてきました。

子供の頃の計画通り、“知命”にて親父とで60年の写真撮影業も断念、今は“藝事（わがまま）一筋？”

世界に誇る“瞬間藝術”である『書』、『書く』という事が、軽視されがちな昨今“21世紀に継承しなければならぬ”責務さえ感じております。

漢字発祥の地中国、原点ともいうべき中国、それを

昨年（第12号）にて書道家として活躍中の竹内春翠氏（1回生）を紹介しましたが今回、本人から書にかける情熱と書を通した日中交流について寄稿いただきました。

肌で感じ勉強し、日本人の心で日本人にしか出来ない書を本場の方々に見て戴く、大袈裟に言えば日中友好・民間交流だと思っております。

日本の書家は、相手を貶す事があっても、（もっともそうでない方々も沢山みえるとは思いますが……）誉めることはない。特に、ここ東濃の地は、もっとも次元が低く、情けないとしかいいようがありません。

中国人は、素直にしてそして真剣に相手を見てくれます。

今は、小生美味しいもの（中国での個展・交流展）を一人で食べている、贅沢をしているという感。分かってくれる人が出現しないものかと思いつつ……、可能なかぎりそして与えられるチャンスを最大限に活用し……こんな状況です。

八百屋ほどの成人病を抱え、命続く限り頑張りたいと思っております。小生のやっている事は、ほんのほんの微力な事。母国語を軽視すれば、文化が亡びるといわれています。先の世を考えない恐ろしい考え方の波に流されまいと、ささやかながら逆走しております。

こんな変わり種が一人ぐらい居てもいいんじゃないかと、自負し……。

“人間らしい温か味のある田舎のいものような書を書きたい”

どうぞ皆様、今後ともよろしく御願ひ申し上げます。



22回生 堀江敏幸氏、三島由起夫賞受賞

(東濃新報 199.5.28付より)

堀江さんに三島由起夫賞 多治見市出身 朗報に家族もビックリ

新潮文芸振興会が主催する第12回三島由起夫賞がさきごろ発表され、多治見市出身の堀江敏幸さん(35)の作品「おぼらばん」(青土社刊)が同賞に輝いた。

「おぼらばん」は、堀江さんのパリ留学時代の追想記で、小説でもなくエッセイでもない15編からなる作品。「おぼらばん」とはフランス語で「以前に」という意味になる。同賞の選考委員を務めた石原慎太郎東京都知事も「知的な落ちのある作品で、独特の印象を受ける」と評した。

堀江さんは多治見中学、多治見北高校を経て早稲田大学に進学。フランス文学を専攻し、現在は明治大学で助教授を務めている。突然の朗報に堀江さんの父、庄七さん(58)も「小さい頃から、ほっといても自分で勝手に勉強しているという子でしたが、こんな大きな賞をいただけるとは」と、とまどいながらも喜びを語っている。

青土社のホームページより

第12回三島由起夫賞受賞!! おぼらばんauparavant 堀江 敏幸著:1998年刊,判型四六,214頁,1900円,ISBN4-7917-5651-7 変貌するパリとその郊外で暮らす移民たち,ディアスポラ状況にある居留者たちに澄んだ眼差しを注ぎ、磨きぬかれた文体で描かれた、もうひとつのパリの相貌。

堀江敏幸(ほりえ・としゆき)

1964年1月3日生まれの山羊座、血液はO型。岐阜県生まれ。

早稲田大学文学部仏文科卒業。

東京大学大学院博士課程中退。

パリ第3大学博士課程留学。現在は明治大学助教授。

20世紀フランス文学専攻。著書に『郊外へ』(白水社、1995)、主な訳書にエルヴェ・ギベール『赤い帽子の男』(集英社、1993)『幻のイメージ』(集英社、1995)、ミシェル・リオ『踏みはずし』(白水社、1994)がある。

《堀江さんに一問一答》

- ★お好きな食べ物は何? : ホームメイドのタルト(とくにフランボワーズの)。
- ★お好きなお酒は? : 酒はたしなむ程度。飲むなら日本酒の冷酒(甘口)、バーボン。
- ★お好きなお花: 存在感のない花……。
- ★お好きな樹木: けやき。
- ★お好きな鳥: スズメ。
- ★お好きな魚: メダカ。
- ★お好きな動物: 大型動物。キリン(写真参照、自宅で飼っているワシントン条約違反のミニ・キリンの親子)、カバ、ゾウ、バイソン、ラクダ、etc…総じて草食動物系。
- ★お好きなスポーツ: 観戦するなら何でも。ことにハンドボールとバドミントンが好き。実際にやるなら卓球。右のペンホルダー、ドライブ主戦型。ときどき前陣速攻を披露。
- ★お好きな作家: 「好きな作家」はいない。好きな「作品」があるだけ。
- ★現在継続しているお仕事: 『図書新聞』で月に一度、エッセイ「回送電車」連載。『書齋の競馬』で隔月、「いつか王子駅で」連載。『読売新聞』で文芸季評を担当、初回は6月8日予定。『小説 TRIPPER』で次号から不定期に登場。

著者から読者のみなさんへ

拙著『おぼらばん』が世に出るまでの経緯を記して、青土社ホームページ上で自己紹介に代えたいと思います。

いきなり他社の話で申し訳ないのですが、『郊外へ』(白水社)という散文集を上梓してしばらくした一九九六年の初頭でしたか、それを読んでくださった青土社書籍部のS・T氏より、移民が登場するエッセイを書き下ろして欲しいとの熱心なお誘いがありました。他に抱えている仕事もありましたし、勤務先との兼ね合いでまとまった時間が取れないからと、いったんはお断りしたものの、ならば「ユリイカ」で書きためましようという話になって、とうとうその年の九月号から、巻末の《ワールド・カルチュア・マップ》の枠内で、何を書くのかまったく未定のまま、見切り発車をしてしまったのです。通しのタイトルは「遠い街」。内容はともかく、編集後記(偏執好奇?)とおなじ活字の三段組が大変に控え目な、美しいレイアウトで、当初は薄いイラストの拡大鏡を付録につけようなどと話していたものです。

*

書籍部のS・T氏と私を引き合わせてくれたのは、元「ユリイカ」編集長で、現在はべつ文芸出版社におられるT・N氏でした。別れ際の、まるで根拠のない明るい励ましが、本当にありがたく、こころに染み入ったものです。雑誌掲載時の最初の担当は、その後ベストセラー連発の出版社に移られたK・H氏。表題作となった短篇「おぼらばん」を、メロディの午後九時、デッドラインだとわかっていながら下北沢の酒場で——なぜ酒場なのか?——待ち合わせ、原稿を手渡ししたことが忘れられません。カットも間に合わず、卓球のラケットの挿し絵を彼が描いてくれました。そのあとを継いでくださったのは、現在も「ユリイカ」におられるペンギンと島尾敏雄が好きなY・Oさん。彼女は未熟な書き手を最後までやさしく導き、無事S・T氏にバトンを渡してくれました。ちなみに『おぼらばん』の末尾に入っている「のぼりとスナフキン」は、彼女の企画による「ムーミン特集号」に寄せたものです。そして拙文が形をなすまで辛抱強く待ちつづけたS・T氏は、まとまりのない十数篇をみごとに組み直し、おまけに港千尋氏のすばらしい写真を配して装丁まで手がけてくれました。

要するに『おぼらばん』という本は、青土社の辣腕編集者四人の力がうまくむすばれて仕上がったものなのです。文学的にはどこにも拠り所のない書き方を彼らが積極的に支持し、励ましてくれなかったら、私はゴールまでたどり着くことができなかつたでしょう。単行本刊行に理解を示してくださった故清水康雄社長の英断は言うまでもなく、今回の三島由起夫賞受賞という突発事故は、やはりつねに受け身な語り手の「私」にふさわしい、いくつもの偶然の出会いから生まれた僥倖であろうと考えています。内容はどうあれ、本書はその意味でまぎれもない幸福の書と言って差し支えないでしょう。読者の方々が、このささやかな幸福を分かち合ってくださいましたら本望です。

1999.6.01 堀江 敏幸

第10回東京支部懇親会のご案内

会員の皆さまには、ますますご健勝にてご活躍のことと存じます。

平素は支部運営にご協力いただき御礼申し上げます。

さて、本年も懇親会を下記の通り開催する運びとなりました。ご多用のこととは存じますが、同期の方々をお誘い合わせの上、是非ご出席下さいませようご案内申し上げます。

多治見北高同窓会東京支部

総会実行委員会 (10、20、30回生)

代表幹事 鈴木全、西村由美子、奥村功

記

日時 平成11年11月13日(土) 午後3時～7時

受付 pm 2:30～

総会 pm 3:00～3:30

フォーラム pm 3:30～5:00

懇親会 pm 5:00～7:00

会場 主婦会館プラザエフ (03-3265-8111)

※会場までの道筋は、案内図をご覧ください。

懇親会費 一般7,000円 学生4,000円 (新卒業生は、無料)

年会費 一般3,000円 学生1,000円

○今年も、同窓会本部より若尾会長、尾関副会長、宮地副会長、小芝顧問、母校から生田校長先生、西田智子先生他恩師をお招きする予定です。

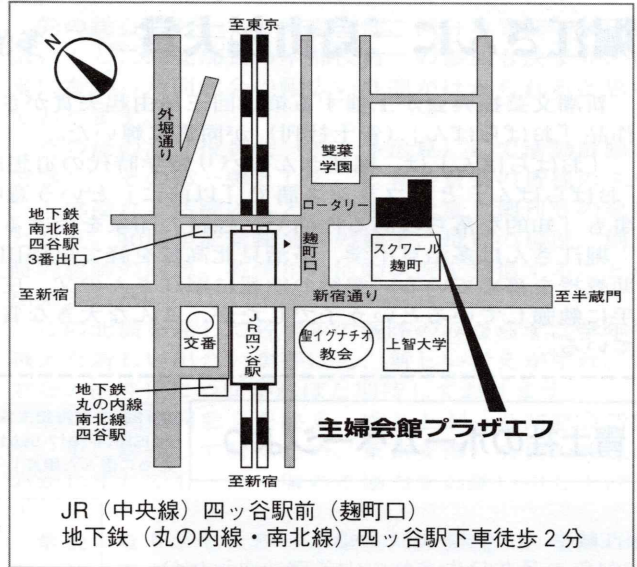
○フォーラムでは、2人の講師を招き、いにしえから宇宙へと壮大なスケールの思考をお楽しみいただきます。

「宇宙をとらえる撮像素子」木股雅章氏 (10回生)

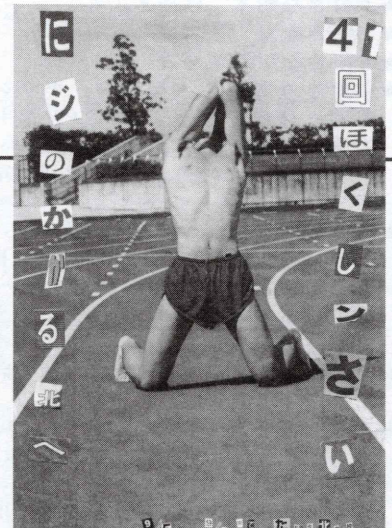
「今時の考古学事情」斎藤基生氏 (10回生)

出欠のお返事は、準備の都合もありますので、10月20日までに届きますようお願いいたします。

今後の名簿整理のため、万一ご出席いただけないばあいでも、必要事項をご記入の上、ご投函下さい。



昨年の総会、懇親会の様子



今年の「北辰祭」のパンフレット

編集後記

東京支部会報は年1回の発行としておりますが途中年2回発行したこともあり、今回(平成11年)で第13号を発行することになりました。毎回同窓生各位にはご協力を頂き厚く感謝を申し上げます。以前は原稿収集に苦勞しておりましたが、ここ数年お願いすれば快くお引き受け頂き、原稿を送って頂いております。同窓生各位の東京支部へ寄せる熱い思いが強く感じられる昨今です。会報を通し、母校卒業後の同窓生の活躍、近況をお知らせし、同窓生の交流が深まればと思います。今後も各回生の同期会、集い、同窓生の個展等ございましたら写真と簡単なコメントを編集委員に寄せて頂きたいをお願いします。また、住所変更も編集委員までお知らせください。では11月13日、第10回支部総会・懇親会で皆様にお会い出来ることを楽しみに!!

編集委員 (連絡先)

〒338-0804 埼玉県浦和市上木崎1-10-1-1203 愛知絃治 TE./FAX 048-825-0215

〒131-0043 東京都墨田区立花6-8-1-304 原田英明 TEL 03-3616-5398